平成28年5月24日　日刊産業新聞

廃バッテリー

市中相場上げ一服

地金低調から頭重い

廃バッテリー（使用済み自動車用鉛蓄電池）の市中相場の上昇が一服している。韓国向けの輸出急回復を背景に、春先から反発していたが、足元の市中取引はキロ70円台半ば（税別）で上げ止まっている様子。鉛相場の低調推移も上値を重くしているようで、需給バランスと相場の折り合いがついてきた。

鉛リサイクル原料の廃バッテリーの市中相場は、韓国向け輸出と国内リサイクラーの集荷競争が過熱して高騰し、昨年前半は100円を付ける局面もあった。しかし昨年10月、韓国政府が対日スクラップ輸入の放射能検査を厳格化したことなどによって輸出が滞貨し、一時的に日本国内の需給バランスが緩和。市中相場は急落し、今年3月前半には約5年ぶりに70円を下回った。

しかし、韓国の対日輸入量は昨年10月の約3300㌧から、3月は3倍強の約1万800㌧に急増した。市中相場も3月下旬の底値から急反転し、80円に迫る勢いだった。廃バッテリー相場の変動要因は相場より需給が大きいため、再び原料調達難となった二次精錬メーカーからは「また90―100円に戻ってしまうのでは」という懸念の声も挙がっていた。

しかし足元では反発基調が収まり、市中相場は75円前後で落ち着いている。3―4月前半にかけてロンドン金属取引所（LME）相場がトン1900㌦近くから1600㌦台まで急落し、国内鉛建値も約3年ぶり安値の24万円台前半に下落するなど、相場要因の下げ圧力が強まった。手持ち筋の様子見も加わり、4月の対日輸入は前月比3割減の約7500㌧と7カ月ぶりに大幅減少した。

市中相場の反発幅が当初予想より小幅にとどまり、二次精錬メーカーはひとまず安堵の表情。市場関係者からは「相場無視の廃バッテリーの値動きに、鉛相場が織り込まれたとすれば大きな変化」と話しており、目先の相場の方向感を注視する構えだ。